

保育科学生の「主体性」における考察 — 中動態の概念から —

Consideration in “Independence” of nursery school students — From the concept of middle [voice] —

山 村 けい子*
(令和4年1月7日受理)

要約

保育所保育指針等が2018年に改定され、その中で「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が明記され、「主体性」を育む内容が書かれている。また、高等教育のグランドデザインでは「生涯学び続ける力や主体性を涵養するために…」¹⁾とある。近年、この「主体性」を身につけることをあらゆる教育の目指すこととして言われてきている。まず、この「主体性」について本学の学生はどのようにとらえているのかを実習前後にアンケートを取り、実習後に「主体性」に対する理解がどのように変わったかを考察した。

その結果「主体性」が「能動的」であるという理解が多かった。では、「主体性」でないという事は「受動的」ということであるのだろうか。「中動態」という哲学的概念の観点から「主体性」について分析し、「主体性」育むことをめざす教育的意義を明らかにしていきたい¹⁾。

キーワード：主体性、中動態、自己変容

keywords：independence, middle [voice], self-transformation

1. はじめに

3回目の改定から10年目の2018年に保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領が改定された。

保育所保育については、「子どもが現在を最も良く生き、望ましい未来をつくり出す力の基礎を培うために、環境を通して養護及び教育を一体的に行っている」²⁾とされている。幼保連携型認定こども園や幼稚園と共に、「幼児教育」を担う施設として、「教育」に関わるねらいと内容に関しては、幼保連携型認定こども園教育・保育要領及び幼稚園教育要領と「整合性」を図ることとなった。

また、「幼児教育」において育みたい子どもたちの「資質・能力」は、「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」を示し、そして、これらの資質・能力

が、保育内容の5領域「健康・人間関係・環境・言葉・表現」の基盤となっている。幼児期の終わり頃には具体的にどのような姿として現れるかを、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として明確化した。

その中に「子どもの自分に対する自信や自己肯定感を育てていくことは、保育の大切なねらいの一つである。一人一人の子どもが、保育士等との間に形成された信頼関係を拠りどころとしながら、日々の生活の中で主体性や生きることへの意欲を育んでいることを、保育士等は常に心に留めながら、子どもと関わるのが大切である」¹⁾とある。また、高等教育のグランドデザインでは「生涯学び続ける力や主体性を涵養するために…」²⁾とある。

近年、乳幼児から大学生までがこの「主体性」を身につけることをあらゆる教育の目指すことと

(*やまむらけいこ 保育科講師 幼児教育学・保育学)

言われてきている。この「主体性」とは、自分の意志や判断によって自ら責任を持って行動する態度や性質である。

つまり「能動的」と捉えられているのである。「主体性」は、このような概念としてとらえられ、保育、教育の場面で本当に育てていけるものだろうか。

2. 研究目的

保育や教育の場面では「自分からする」と「他人にやらされている」ということが度々ある。「他人にやらされている」という表現は、抑圧的に思われるが、主体、または主語がどこにあるかがこの「中動態」の観点から考えるには、必要な表現であるのでこのままの表現にしておく。この「自分からする」という行動が「能動的」であり、「他人にやらされている」という行動が「受動的」と対立的に考えられている。

國分（2021）は「中動態」を次のように説明をしている。

能動態と受動態の対立は「する」と「される」の対立であり、意志の概念を強く想起させるものであった。われわれは中動態に注目することで、この対立の相対化を試みている。（中略）主語が過程の外にあるか内にあるかが問われているのであって、意志は問題とならない。すなわち、能動態と中動態を対立させる言語では、意志が前景化しない³⁾。

つまり「主体性」が「能動的」であるという概念には限界があり、意志とは別の「中動態」という概念で捉えることで実習に臨む学生の「主体性」についてもっと理解が深まるのではないだろうか。

また、子どもの「主体性」を育む保育者を育成するには現場の「実習」が、子どもの「主体性」を考える重要な機会になるのではないだろうか。学生自身は、この「主体性」をどのように理解し、捉えて実習に臨んでいるのだろうか。本稿では、「主体性」を「中動態」の概念の観点から明らかに

する。

3. 中動態とは

中動態とは、インド＝ヨーロッパ語に存在していた「態」である。8000年以上の前の時代よりインドからヨーロッパにかけて広い範囲で用いられた。能動と受動の区別は文法の「能動態（active voice）」と「受動態（passive voice）」の区別に対応している。英文等では態は「能動」と「受動」しかない。

「能動態と受動態の対立は「する」と「される」の対立であり、意志の概念を強く想起させるものであった。われわれは中動態に注目することで、この対立の相対化を試みている。かつて存在した能動態と中動態の対立は、「する」と「される」の対立とは異なった位相にあるからだ。

そこでは主語が過程の外にあるか内にあるかが問われるのであって意志は問題にならない。すなわち、能動態と中動態を対立させる言語では、意志が前景化しない。⁴⁾

次に「意志（Will）の概念」については、一般に「目的や計画を実現しようとする精神の働き」を指す。

実現に向かって「何らかの力、原動力」である。「意志」は自分や周囲を意識しつつ「働きを成す力」である。「意志」は物事を意識していなければならない。つまり自分以外のものから影響を受けている。行為をある人に帰属させることができる。意志は意識されたものから独立していなければならない。

すなわち自発的でなければならないが、そこには矛盾がある⁵⁾。

「意志」ということが、「中動態」には大きく関わっており、この概念のことについても理解をして「中動態」の観点から考えていくうえで重要である。

4. 研究方法

今回は、兵庫大学短期大学部保育科第三部3年生79名（女子78名男子1名）保育実習指導Ⅱの授業中にレポート課題を出した。本学では、保育実習指導Ⅱの授業10回目が終わった時点で今期最初の実習として教育実習に参加する。

3年生に進級をして初めて行く実習という事で教育実習に行く前にアンケートを取ることにした。どちらも責任実習であり、自ら指導計画を立て半日、または全日実習を経験する。自ら「指導計画」を立て、子どもたちに保育をするというところに重点を置いている。

（実習参加の人数は同じである）

1) 実習前のアンケート質問

【質問内容】 子ども理解について①

【主体性とは…】

「自分の意志・判断によって、みずから責任をもって行動する態度や性質」のことです。

1. まず、実習生として「主体性」をもって実習に臨む態度を「具体的」に挙げてください。

上記の質問について回答をした結果をグラフにしてまとめた。

実習後の11回目の授業で次のような質問をし、アンケートに回答をしてもらい、まとめた。

2) 実習後のアンケート質問

1. 自分の考えが大きく変わった。
2. 少し変わった
2つのうちから選び「変わった点」も記述してください。

実習前後のアンケート結果をグラフにして比較し、学生は何に変化があったかを調べ、研究結果に基づき「中動態」の観点から考察をし、「主体性」とはどのようなものであり、また教育の中で育つものであるかを明らかにしていきたい。

5. 研究結果

1) 実習前のアンケートの結果

*この場合の実習とは、教育実習である。

【質問】 実習生として「主体性」をもって実習に臨む態度
(複数回答) 学生79名

一番多い回答は、「わからないことは何でも聞く」であった。次は「先生から言われて動くことではなく自分で考えて動く。積極的に行動をする」ということであった。この2つの回答は相反するような回答であり、意外な結果であると言える。

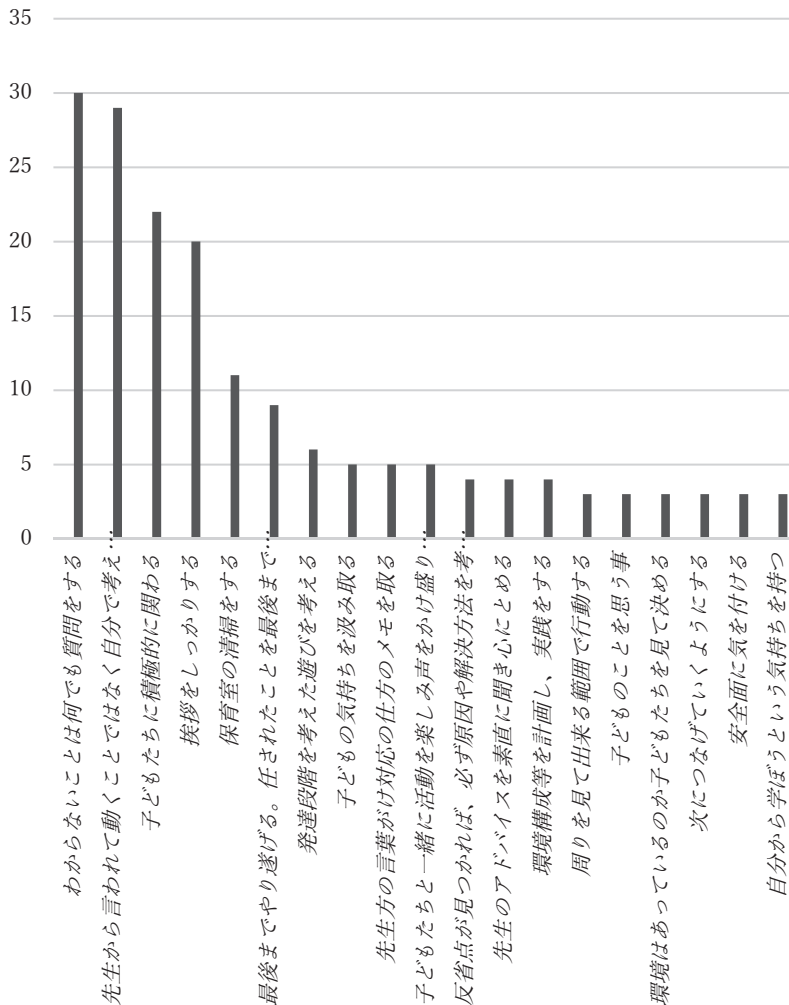


図1) 実習生として「主体性」をもって実習に臨む態度

2) 実習後のアンケート結果

1. 自分の考えが大きく変わった。
 2. 少し変わった
- 2つのうちから選び「変わった点」も記述する。

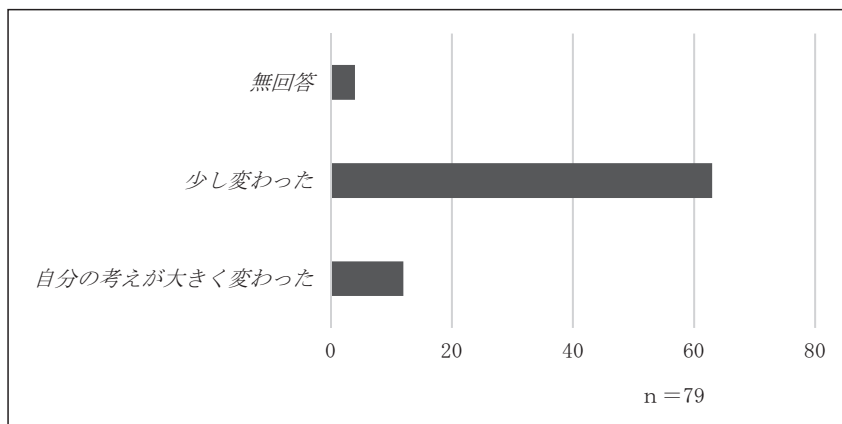


図2) 保育実習Ⅱを終えて

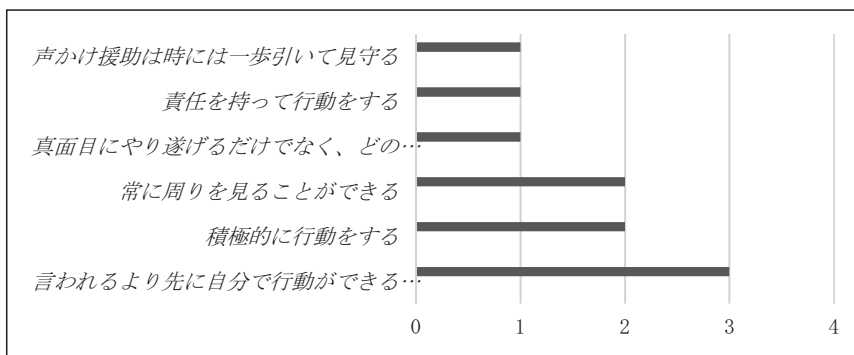


図3) 自分の考えが大きく変わった点

②すこし変わったと思う点（複数回答）

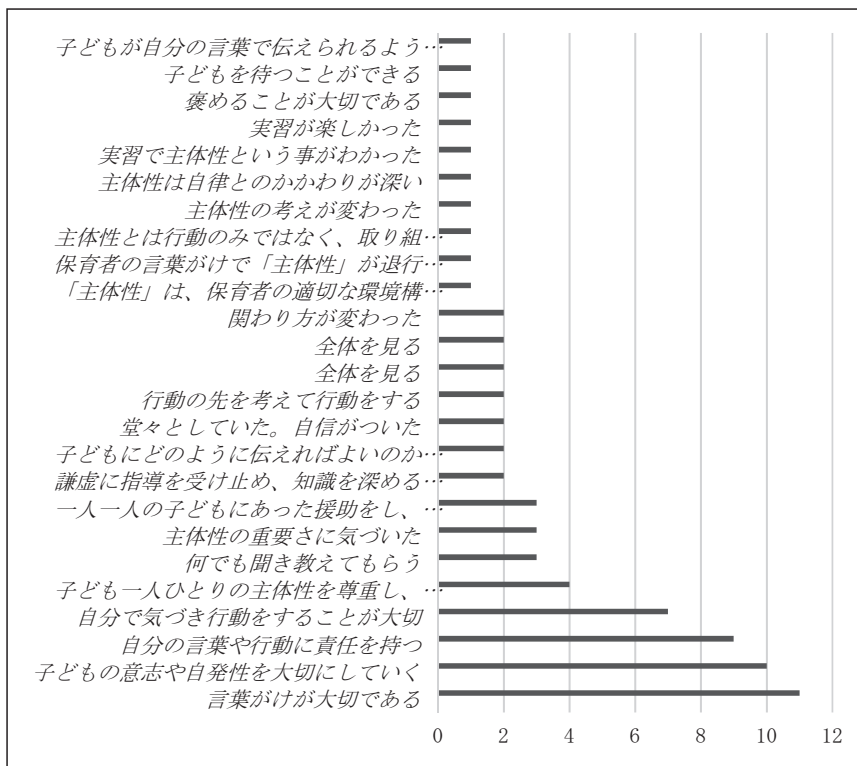


図4) 少し変わったと思う点

まず、実習前の「主体性」とは「自分の意志・判断によって、みずから責任をもって行動する態度や性質」という概念をわかったうえで「実習に臨む態度」についてアンケート取った。結果は「わからなかったら質問をする」、「先生から言われて動くのではなく自分で考えて動く」という回答が多く、「責任」という言葉は出てきていない。

実習後のアンケートの結果から「大きく変わった」と「少し変わった」では、「少し変わった」というほうが圧倒的に多く約4倍になった。

「変わった」という内容も2つの結果に対する内容も違っている点が多くみられ、回答の数も必然的に多くなっている。「主体性」の概念から「責任を持つ」ということを例に挙げると「大きく変わった点」においては下位に位置しており、「少し変わった点」では上位に位置している。このこと

から「主体性」について「中動態」の概念の観点から「主体性」とどのような関係性があるのかを考察していくことにする。

6. 総合考察

まず、「主体性」という事を知ったうえで、実習前レポートでは、「わからないことは何でも質問をする」が1番多く、2番は、「先生から言われて動くことではなく自分で考えて積極的に行動をする」という結果になった。

「わからないことは何でも質問をする」という行動自体は、能動的である。しかし、本来行動することが「主体性」であると考えれば行動する前に質問をしてから行動をすること自体は、「主体性」があると言えるのだろうか。この行動に「意志」があるとは言えないが、「質問をする」ことに

は意志があると思われる。「自分の言葉や行動に責任を持つ」が2番目に多かったのだが、この回答には、「主体性」であるように思われるが、果たして「主体性」であるかどうかを言い切れないのではないだろうか。「責任」ということを前述したが、責任を負うという事は「能動的」な時に使う。そしてこの文章にある「責任を持つ」という解釈は、「責任を引き受ける」という状態である。「責任を負う」とは、責任をマイナス要素として認識した上で引き受けるということである。「責任を負う」はあくまでも保証するという意味であり、責任を取るというのは保証するのと合わせて懲罰を含む場合に使うといわれている。

國分(2021)は、「責任を負うためには、自分の意志で自由に選択ができなければならない」⁶⁾とし、「責任を負うためには人は能動的でなければならないということである。受動的であるとき、あるいは受動的であらざるをえないときは、人は責任があるとはみなされない」⁷⁾と述べている。責任を持つというのは誰が主体か、と考えるとこの行動の主体は内にあるので「中動態」といえる。

では、「能動的」な責任を負うも主体がどこにあるかを考えると内にあり、「中動態」と考えられないだろうか。少し意味合いは違うが「能動的」と解釈はされてはいるが、「中動態」と解釈できる。学生のアンケート結果は「責任を持つ」という結果であるのでその文章に対しては「中動態」と解釈をすることとする。責任の主体が「内側」にあり、学生自身という事になる。

次に先行研究の丹下(2019)が「『中動態』としてのケア、『ハビトゥス』としてのケア」の論文の中で以下のように述べている。

國分功一郎はこの点について、謝罪という行為を例に挙げ、重要な議論を展開している。能動の形式で表現される事態や行為であろうとも、それを能動の概念によって説明できるとは限らない。「私が謝罪する」ことが要求されたとしても、そこで実際に要求されているのは、私が謝罪することではない。私のなかに謝罪の気持ちが現れ出ることなのだ。能動とは呼べない状態のことを、われ

われは「受動 passive」と呼ぶ。受動とは、文字通り、受け身になって何かを蒙ることである。〔中略〕だが、それらを受動で表現することはとてもできそうにない。〔中略〕謝罪が求められている場面で「私は謝罪させられている」と口にしたらどういうことになるかはわざわざ言うまでもない。口先だけの謝罪は謝罪にはならない。謝罪の気持ちが私のうちに湧き起こることがなければ謝罪するという行為は成り立たない」⁸⁾

この丹下(2019)が國分(2021)のこの考えを先行研究の中で取り上げているのは、「謝罪」という行為が自ら望んでした行為ではなく、他人に半ば強制的にさせられている点を強調していると考えられる。私たちが思う「能動態」との違いを強調しているのであろう。丹下(2019)は更に國分(2021)の能動態と受動態との関係を対立関係として捉えているのではないことを引用している。

また、丹下(2019)は、國分(2021)野中動態について続けて以下のようにあげている。

しかし、謝罪の気持ちはその気がないのに起こそうと思って起こせるものではない。だから、謝罪するという行為は本来、能動態では表現できないことになる。だからといって、では受動態で言い表せるかということ、全くもって無理な話である。謝罪するとは、私が自らの意志によって引き起こすことのできない「相手に悪いことをしたという思い」が自分のうちに湧き上がり、「許しを得たい」「償いたい」という思いに居ても立ってもいられなくなって、相手の前でどこまでも身を低くすることであり、このプロセスは主体の変容なしには実現されえないのである。こうした事態は、能動態によっても、受動態によっても語り得ない。「中動態」とは、能動態によっても受動態によっても語り得ない事態を表現可能にする文法なのである。「中動態」という名称から、能動態とも受動態ともつかない宙ぶらりんの状態をイメージすることも知れないが、決してそうではない。「主体性」というものを表現しうるのは、能動態ではなく、む

しろ中動態の方なのである⁹⁾。

このように考えると「主体性」とは「能動態」というのではなく「中動態」という概念と関わりが深い。

つまり「能動態」が積極的に自ら活動するという活動で考えられるのではなく主体が外に向いているか、内にあるのかというように考えるのであれば「活動的な行為」が必ずしも「主体性」を意味するのではないと考えられる。

学生は、「主体性」については、実習後のアンケートにある「言葉がけが大切である」、「自分の言葉や行動に責任を持つ」と捉えている。

これを分析してみると「大きく変わった点」においては、「言われるより先に自分で行動ができるようになった」が1番多い。このことは、「言われるより先に」という点においては、実習前よりも大きな変化がみられる。これは自己変容であると言える。しかし「言われるより先に」という点においては「意志」に関わる。前述にある「意志は自分や周囲を意識しつつ働きを成す力である。意志は物事を意識していなければならない。つまり「自分以外のものから影響を受けている」という概念から考えるとこの「言われるより先に」ということは「他者」から影響を受けているということになる。

行動の対象が主体の「内」ではないので「中動態」の観点から考えるとやはりこのことは「能動態」と考えられるだろう。「主体性」という事から考えると「言葉がけが大切である」は「言葉をかける」は、主体は学生であるが、「言葉をかける」対象は「子ども」であるので学生自身の「内」ではなく、学生以外の「子ども」である「外」で完結をしている。つまりこの行動は「能動態」と考えられる。

しかし、2番目の「自分の言葉や行動に責任を持つ」に関しては、主体が学生で「言葉や行動に責任を持つ」も学生の中で完結をしているのでこれは「中動態」と考えられるのではないだろうか。

「自分の言葉や行動に責任を持つ」に関しては、行動に現れる以前に主体がどこにあり、それが内

か外の完結するかによって「主体性」の考え方が変わってくる。

「自分の言葉や行動に責任を持つ」にある「責任」とは、前述している「持つ」と「負う」とでは意味が違ってくるので当然解釈も違ってくる。「持つ」というのは、主体が内にあると考え「中動態」で「負う」というのは主体が外にあるので「能動態」と解釈できる。

次に「このプロセスは主体の変容なしには実現されえないのである」¹⁰⁾という文章の「主体の変容なしに実現されえない」という点に注目してみることにする。

この主体は変容するという点においてESD (Education for Sustainable Development 持続可能な開発のための教育)における「自己変容」と類似している。

実習前のアンケートでは、一番多い回答は「わからないことは何でも質問する」という行動である。そして実習後の回答からは「言葉がけは大切である」と自ら行動した結果を回答としている。行動を他者からの指示を待って行動をするのではなく進んで行動をしていることが一番に挙げている。大きな変化であり、「自己変容」と言える。

7. おわりに

「中動態」という哲学的な観点から「主体性」を捉えると必ずしも「能動的」な活動が「主体性」があるとは言えないのではないだろうか。

学生の行動が一見「受動的」に見えていても「能動的」か「受動的」の2項でしか判断されなるときその学生は「主体性」がないと判断するのはあまりにも短絡的な見方である。学生の本来持っている資質までをマイナスなイメージを持つ危険さえあるのではないだろうか。

この「中動態」についてもっと研究を深め、行動や表現がうまくできない人々に対していろいろな観点から理解をしていくことが重要である。そして乳幼児期に関しては、「主体性」を育てるといふことの前に一人ひとりの個性を認め、一方的な決めつけや判断ではなく、「主体性」の概念を捉えなおし、保育、教育の中で改めて考えていくこと

が重要である。そして成長をしていくなか環境を整え、様々な経験の積み重ね、高等教育へと繋げていくことが必要であることは明らかである。

〈引用文献〉

- 1) 中央教育審議会『2040年に向けた高等教育のグランドデザイン』2018年11月 文部科学省 p6
- 2) 厚生労働省『保育所保育指針解説』2018年2月 p5
- 3) 國分功一郎著『中動態の世界』2021年2月 医学書院 p97
- 4) 同書
- 5) 國分功一郎著『中動態の世界』2021年2月 医学書院 p23
- 6) 國分功一郎著『中動態の世界』2021年2月 医学書院 p25
- 7) 同書
- 8) 丹下博一著『「中動態」としてのケア、「ハビトゥス」としてのケア』2019年 Sophia University Junior College Division Faculty Journal 第40号 p5
- 9) 同書
- 10) 同書

〈参考文献〉

1. 厚生労働省『保育所保育指針解説』2018年2月 p5
2. 國分功一郎著『中動態の世界』2021年2月 医学書院
3. 丹下博一著『「中動態」としてのケア、「ハビトゥス」としてのケア』2019年 Sophia University Junior College Division Faculty Journal 第40号、1-20
4. 國分功一郎 熊谷晋一郎著『〈責任〉の生成－中動態と当事者研究』2021年7月 新曜社
5. 田中優著『中動態としての地域志向型 PBL に関する研究2021年3月日本福祉大学全学教育センター紀要』第9号

